

## 書評：リチャード・フロリダ著、井口典夫訳『クリエイティブ都市論－創造性は居心地のよい場所を求める』

前都市研究センター副所長兼研究理事

鈴木 敦

住む場所がすべてを決める。

リチャード・フロリダ<sup>1</sup>の *Who's Your City?: How the Creative Economy Is Making Where to Live the Most Important Decision of Your Life*, Random House Canada<sup>2</sup>, 2008 の邦訳が出た。<sup>3</sup> クリエイティブ・クラス論の提唱者の新著は、都市論の世界では、村上春樹『1 Q84』<sup>4</sup>に喩えられよう。

フロリダ教授は、(広義の)クリエイティブな才能を有する人々を集めた都市が繁栄するこれからは、世界各国がクリエイティブな才能を奪い合うので、都市は寛容性が大事と説いた。クリエイティブ・クラスは、本書でいえば、「科学、テクノロジー、芸術、デザイン、エンターテインメント、メディア、法律、金融、マネジメント、医療、そして教育」に携わる人々になる。(p.129)

ただし、本書は、クリエイティブ・クラス論から入るのではなく、先ず、第1章において、個人にとり居住地の選択は、職業選択及び配偶者の選択ほど大事であると確認する。

第1部「メガ地域の世紀」は、「グローバリゼーションに伴い、世界がフラット化している。人はどこにいてもクリエイティブな活動ができる」という通説に客観データをもって反論する。フロリダ教授によれば、才能、イノベーション、クリエイティビティ等は地域的に偏在しており、どこに住んでいても成功の機会を公平に有する訳ではない。世界は、スパイクである。人口、GDP、夜間光量等を示す地図で、針のように伸びた高い数値の地域と針の立たない平たい地域がはっきり分かれる。大都市が連結した、巨大な人口を擁する「メガ地域」であって、高いGDPを有する地域は、たしかに、世界的に緊密につながり、相互の差異は少なくなっている(フラット化している)。しかし、それ以外の、スパイクのない地域との格差は拡大している。

グローバル経済は、20から30のメガ地域が担っており、これらメガ地域の人口は世界人口の5分の1に満たないが、経済活動の3分の2とイノベーションの8割がそこでなされている。我が国は、メガ地域上位5地域のうち2つを有し、「広域東京圏」の経済規模は世界最大級の2.5兆米ドル、「大阪＝名古屋圏」は世界第5位の1.4兆米ドルである。

マクロの俯瞰からどうクリエイティブ・クラス論につながるかと思っていると、フロリダ教授は、地域を4つのグループに分類する。すなわち、①イノベーションの拠点となる少数の先進地域、②他地域で生じたイノベーショ

<sup>1</sup> トロント大学ロットマン・スクール・オブ・マネジメント教授兼同マーティン・プロスペリティ・インスティテュート所長

<sup>2</sup> カナダ版は、米国版にない地図を含む。

<sup>3</sup> 2009年2月、ダイヤモンド社刊。底本は、カナダ版。原著第12章から第15章(米国におけるライフステージ別の転居先選びのノウハウ)は、訳出せず。

<sup>4</sup> 2009年5月27日、『1 Q84 BOOK』及び『1 Q84 BOOK2』発売。発売前から予約が殺到。7月7日、200万部に達した。出典：2009年7月7日11時15分付け Yomiuri Online 掲載記事。

ンと創造性を利用して、財・サービスを開發する新興地域、③開發途上国の大都市、④グローバル経済に組み込まれていない「谷底」である。才能を引きつける「持てる」地域と才能の流出が止まらない「持たざる」地域がある。

ロバート・ルーカスは、経済の根本には「集積しようとする力」が働いていると説いた人、生産力、スキル、才能等が特定の場所に集まり、経済成長が起きる。ルーカスは、ジェーン・ジェイコブズの理論を高く評価し、「人々が特定の場所で才能とアイデア、エネルギーを結集しなければ、意味のあるものは生まれない。」と述べた。(p.80)

フロリダ教授は、「ジェイコブズの理論によれば、都市は複雑でかつ自己組織化する生態系である。その形態はあらかじめ決めることはできず、外部からコントロールすることはできない。そうした多様性こそがイノベーションと経済成長の真の源」だとする。(p.83)

第2部「場所の経済学」は、個人の都市への移動のメカニズムを分析する。現代では経済的利益と自己実現を求めて移動する人々と家族及びコミュニティの価値を重んじて定着する人々に分かれる。更に、いま高学歴・高収入で才能に恵まれた人々が、一部の大都市＝「稼げる都市」＝スーパースター都市(例 サンフランシスコ、オークランド)に大量流入し、従来そこに居た中産・下層階級が追い出されている。職業上の成功の度合いも居住地に左右される。産業構造は、製造業からクリエイティブ産業及びサービス産業にシフトしている。これら産業の発展は、機械設備ではなく、クリエイティブな才能にかかっている。これから地域を支えるのは、クリエイティブ産業である。クリエイティブ産

業では、イタリアの衣類製造産業の復興の場合のように産業集積が重要である。ミラノには、立地優位性があった。米国の労働統計局(The Bureau of Labor Statistics)の職業データを用いて雇用の立地集積度(LQ)を分析したところ、LQ合計が10以上の地域は、全米で500を超える。<sup>5</sup> 例えば、芸能人の4分の3は、ロサンジェルスで働いている。シリコンヴァレーは、言うまでもない。

### 開放的な気質の人々が集まり、イノベーションと経済発展が起きる。

フロリダ教授は、個人が幸福感を得られる居住地について大規模な社会調査を行った。その結果、安全、学校等基礎的公共サービスと公園、美術館等アメニティの双方が提供されている居住地でこそ人は幸福を感じることがわかった。居住地の住環境には、見目の美しさ・楽しさ(「ビューティ・プレミアム」)が欠かせない。そして、他人と変わった服装、言動等が容認される開放性が求められる。

心理学によると、人間の性格は、5つの主要因子(経験への開放性、誠実性、外向性、協調性及び情緒不安定性)で判別できる。人間の性格とその人が選ぶ居住地との間には、相関関係が存する。例えば、開放性の高い人々は、大都市圏に住む傾向があることがわかった。特に、東海岸及び西海岸に

<sup>5</sup> 立地集積度(location quotient) = [当該地域のt期におけるi産業の雇用が当該地域のt期における全雇用に占める割合] ÷ [全国のt期におけるi産業の雇用が全国のt期における全雇用に占める割合] 出典: <http://mailer.fsu.edu/~tchapin/garnet-tchapin/urp5261/topics/econbase/lq.htm>

集中している。<sup>6</sup>

性格の似た人々が集まるのは、①歴史的な産業構造、②気候風土、③社会要因 による。例えば、規格大量生産に適した協調性及び誠実性の高い人々は、ピッツバーグ、デトロイト等かつての工業地帯等に集まっている。また、人間の価値観、信条等も地域の性格をつくる。こうして、「都市の性格」が形成される。

「都市の性格」に惹かれて集まってきた人々の性格、人的資本、クリエイティブ・クラス、収入、経済成長、ボヘミアン指数等の間の相関分析によると、経験への開放性のみが人的資本、所得等と強い相関を有する。<sup>7</sup>要するに、フロリダ教授によれば、ボヘミアンに代表される開放的な性格の人々が集まる場所で、イノベーションと経済発展が期待できる。

### 開放性仮説の我が国への適用

以上、本書の主な仮説を概観した。

先ず、「開放的な性格の人々が都市に集まり、イノベーションと経済発展が起きている。」という仮説は、正しいのだろうか？

本書では、膨大なオリジナル・データを統計学的に解析（ベイズ推計及び回帰分析）した結果に基づいて仮説が構築されているので、一般読者が仮説に反論することは極

めて難しい。仮説の当否の判断は、専門学者によるデータ検証を待つしかない。

仮に、米国では開放性仮説が正しいとしよう。しかし、先進国の中で例外的に人口増加が続き、かつ、国民の移動性が高い米国で成立する仮説は、米国よりも社会移動が小さく、かつ、人口が減少する我が国に適用できるのであろうか？

糸口になるのは、いわゆる県民性、「○○町気質」等との比較であろう。我が国には、律令国家 60 余州(国)と江戸期 300 諸藩の地域性が残っていると言われる。例えば、浜松市をはじめとする静岡県西部(遠江国)の人々(遠州人)は、「やらまいか」の気風を有し、たとえ困難でも新しいことに挑戦するとされる。

また、北陸地方における浄土真宗のような宗教の県民性への影響も指摘されている。

更に、城下町、「商都」、漁村等産業構造による気質の違いが広く認識されている。

フロリダ教授の「都市の性格」仮説と県民性の違いは、仮に、県民性の大半が江戸期に形成されたのであれば、あまり大きくない。そうであれば、開放性仮説を我が国にあてはめていけないことはない。

いずれにしても、フロリダ教授の仮説は、その内容そのままに、我々に、新しい経験への開放性の有無を問うているようだ。「開放性なくして、クリエイティブ産業の発展なし」と信じることは、厳密な定量的証明がなくとも、必要なのではないだろうか。

(丁)

<sup>6</sup> Salt water economics 対 fresh water economics と評される地域性を想起させる。東西両岸のハーヴァード、イエール大、MIT、UCLA 等ではケインジアンが優勢で、内陸部のシカゴ、カーネギー・メロン、ロチェスター、ミネソタ大等ではマネタリストが優勢であった。それぞれの地域に集まった学者の開放性の違いか？

<sup>7</sup> ボヘミアン指数は、芸術家、作家、ミュージシャン、映画監督・俳優、ダンサー等が人口に占める割合。出典：フロリダ著、井口訳『クリエイティブ資本論—新たな経済階級の台頭』ダイヤモンド社、2008年